

博物館における多元的「リテラシー」論の適用性と課題

菅 井 薫*

Applicability and Problems of Pluralistic Theory of the Literacy in the Museum

SUGAI Kaoru

abstract

In the museum, the word “literacy” has been used pluralistic contexts and backgrounds. But it is not used by each expression strictly distinguishing. In addition, no studies have ever tried to clarify about the arguments for whom and what. Therefore, what I wish to examine in this paper is two points. The first is to show the dimensions and relationship among pluralistic theory of the literacy. The second is to clarify the applicability and the problem of theory of the literacy in the museum. Then I propose the review and the restructuring of theory of the literacy.

In conclusion, I indicate that the necessity of literacy is explained by four contexts. The first is improvement of understanding the museum. The second is to encourage citizen participation to the museum activity. The third is to support for the use. The fourth is to support of use by school training. Many of these contexts value the literacy as the result of the act. But, I oppose this standpoint and propound a theory to comprehend and explain dynamic literacy.

Key words: museum, museum literacy, literacy, accessibility, support for the use

はじめに：問題の所在と目的

近年、「〇〇リテラシー」という用語が日本の博物館（実践）研究においてしばしば用いられている。具体例を挙げるだけでも、「ミュージアム・リテラシー」（例えば、佐藤 2003）、「メディア・リテラシー」（水越・村田 2003）、「科学リテラシー」（例えば、小川 2008）と多方面にわたる。ただし、それぞれの表現が厳密に区別して用いられてはならず、意味内容が示されなかったり、同じ表現を用いても意味が異なったりするケースも見られ、多岐亡羊な状態にある。この現状に対して、例えば、「博物館教育におけるリテラシー」に関する研究動向の特徴と課題をまとめた先行研究では、複数の意味内容が明らかにされている（長崎 2006）。しかし、各々が主張する「リテラシー」の意味内容を示すことはできても、「なぜ博物館においてリテラシーが必要とされているのか」という、議論の宛先や成立背景については巨視的かつ十分な議論がなされていない。つまり、先行研究には、議論の前提となる問題背景や対象を、批判的に問い返す視点が欠けてしまっている。また、定義された「リテラシー」の意味内容に偏った議論は、定義する側が持つ権力性や意図に対して無自覚になりがちである。そのため、多元的「リテラシー」論の内実を吟味せずに、無批判なままに受容・濫用されれば、リテラシーを要求される側——例えば、利用者——や博物館にとっても、多様な役割・能力を加重することになりかねない。

以上の先行研究の到達点と課題を踏まえ、本稿では次の2点を明らかにすることを目的とする。1点目は、多

キーワード：博物館、ミュージアム・リテラシー、リテラシー、アクセシビリティ、利用支援

*平成17年度生 人間発達科学専攻

元・多文脈化する博物館での「リテラシー」論の前提について、「誰のために（対象）」、「なぜ（目的・背景にある課題）」必要であると主張されているのかという点、意味内容の異同と特徴、関連を明らかにする。ただし、特定の専門領域に特化した「リテラシー」——例えば、「科学リテラシー」——については、必ずしも博物館に限定せずに独立した議論が進んでいるため、割愛する。2点目は、1点目の目的に沿って明らかになった「リテラシー」論の適用範囲とそれが抱える課題を明らかにする。具体的には、これまでは論じられることの少なかった「リテラシーを定義することの意味」について確認し、現在の「リテラシー」論の危うさを指摘する。その上で、博物館（実践）研究における、一方向的な役割・能力論——一方的なリテラシーの要求——から脱する「リテラシー」論の再構築を結論として提案する。

1. 博物館における多元的「リテラシー」論の解釈内容と背景

一般的に「リテラシー」とは、読み書き（識字）能力を示すが、現在では、文字に限らず知識や情報を含めた意味での読み書き能力——「機能的リテラシー（functional literacy）」——へと拡張されている（今井 2009: 6-7）。佐藤学は、「リテラシー」とは2つの意味を担ってきたと指摘する。第1は、『『教養』としての伝統的概念』で、近代になってからは「公共的な教養」や「共通教養」を意味するという。第2は、読み書き能力、あるいはユネスコにおいて定義されている「読み書き能力だけでなく、大人になって経済生活に十全に参加するための職業技能を含む」機能的リテラシーであるという（佐藤学 2007）。

冒頭で述べたように、博物館において用いられている「リテラシー」表現は多様化している。だが、共通する基本的な解釈内容は上述の「機能的リテラシー」から類推する形で、「博物館が提示する情報・メッセージ・活動などを、来館者／利用者が批判的に読み解く、活用する能力」をおおよそ意味している。本章では、これまでの博物館研究で展開されてきた「リテラシー」論が、「誰のために（対象）」、「なぜ（目的・背景にある課題）」必要であると主張されてきたのかを明らかにする。その上で、どのような文脈からそれぞれの議論が成立しうるのか、議論の大まかな見取り図となる相対化を行って確認し、批判的考察を行う。

1-1 キャロル・スタップ（Carol B. Stapp）による「ミュージアム・リテラシー」論

管見の限り、博物館研究において最初に「リテラシー」について詳しく論じたのはアメリカの博物館教育の研究者であるキャロル・スタップであり、「ミュージアム・リテラシー（museum literacy）」という言葉を用いている。スタップは定義をするにあたって、「ミュージアム・リテラシー」とは、博物館のアクセシビリティの理念を集約することであり、博物館のアクセシビリティの曖昧な状態をあらかじめ明確に表現することであると述べている。そして、次のように定義している。「基本的な『ミュージアム・リテラシー』とは、資料（もの）を解釈する能力を意味し、十分な『ミュージアム・リテラシー』とは、博物館の所蔵資料やサービスを、目的を持って自主的に利用する能力を意味する」（Stapp [1984] 1992: 112）。それと同時に、博物館は「展示や出版物、プログラム活動から図書館、研究コレクションや職員の専門家としての知識まで、目的を持って自主的に博物館の全ての資源を利用することができるようにすべきである」と述べている（Stapp [1984] 1992: 117）。つまり、スタップは「ミュージアム・リテラシー」を博物館におけるアクセシビリティ——アクセス可能性（利用のしやすさ）——の問題として位置づけ、論じようとしている。さらに、「ミュージアム・リテラシー」に関する博物館の責任は、組織全体の財政上や意思決定過程の課題へと広がり、市民——来館者および非来館者——が十分に参入できているかどうか論点になると述べている。スタップの主張は「リテラシー」という表現を用いながらも、終始、議論の核心は博物館へのアクセスの状態、博物館がどのようにしてアクセスを保障するのかという点に絞っているのが特徴的である。それ故、スタップ自身も「ミュージアム・リテラシー」という言葉に信頼性を持たせるために、立派な語源や手のこんだ専門用語でよく見せざるをえなかったが、書き直すことができるならばより分かりやすい言葉を使う、と振り返っている（Stapp [1984] 1992: 116）。

1-2 博物館における「リテラシー」論の対象と背景

(1) 第1の文脈：博物館に関する認識や理解の向上

第1の文脈は、博物館の設置者（博物館行政に携わる側）、利害関係者を対象にした博物館に関する認識や理解の向上である（上山・稲葉 2003; 山西 2008）。大阪市立自然史博物館館長の山西良平は、「博物館機能の多面性と館種の多様性に対する深い理解」を「博物館リテラシー」と表し、博物館行政に携わる「組織に蓄積するもの」とであると指摘する（山西 2008: 24）。山西が議論の対象としているのは公立博物館であり、博物館は、法体系の中では「社会教育のための機関」である。だが、館種によって事業の比重、使命・役割が異なる。さらに、近年では、教育委員会の所管とせず、「文化施設」の枠組みに組み込まれていることもある¹⁾。「博物館機能の多面性と館種の多様性」が理解されないまま、ハコモノ施設の側面から、共通する展示機能のみに重きを置くこと——「博物館リテラシーの低下」——を危惧するというのが、山西の主張である。

上山信一と稲葉郁子は、「人々のミュージアム観や発想」を「ミュージアム・リテラシー」と表現し、①都市開発関係者（自治体の都市計画担当者、ディベロッパー、建築家、ゼネコン、業者関係者）、②行政関係者、③地域住民の3者——博物館の利害関係者——に必要であると述べる。そして、各々に応じた具体的な意識変化の必要性とその内容の子細を示している。具体的には、次のような提案がなされている。都市開発関係者であれば、「古いものの保存陳列場所」から「人が集まり創造する場」「都市のフラッグシップ施設」へ。行政関係者は、「無関心」から「既存施設の最大活用」として「地域活性化、産業振興」のための予算から企画を考える。地域住民の場合は、「高尚、分かりにくい」「異物」である施設から「芸術鑑賞以外の使い方」をしてもらうといった変化である（上山・稲葉 2003: 263-268）。

山西、上山・稲葉の論は、博物館（活動）に対する——特に行政関係者の——無理解に問題意識を持つ点で一致している。しかし、「リテラシー」について、山西が「博物館機能の多面性と館種の多様性」への理解とするのに対して、上山・稲葉は規範となる「リテラシー」のあり方（内容）を詳細に提示している点で、似て非なるものではないだろうか。博物館に対する理解のあり方の内容に幅を持たせようとしている山西の論と、意識変化の内容を構成するものを既定している上山・稲葉の論とでは解釈を異にする。より詳細に述べるならば、山西が目指そうとするのはリテラシー獲得の行為そのものであり、上山・稲葉はリテラシーの構成要素を既定した上でリテラシーの獲得なのではないだろうか。この違いについては、2-1で詳しく後述する。

(2) 第2の文脈：博物館活動への市民参加／参画

第2の文脈は、博物館活動への市民参加／参画である（金山 2003; 村上 2008）。金山喜昭は、まず、博物館の情報公開について課題——例えば、市民の意見が届かない展示や偏った一面的な情報提供——があることを指摘している。また、博物館事業への市民の参加が成立するには、博物館への信頼や期待がなければならないが、博物館の情報公開はそのために不可欠の要件であるという。そこで、「情報公開の場として」博物館を機能させるために「博物館リテラシー」が市民に必要であると主張する。「博物館リテラシー」とは、市民が博物館を効果的に利用するために、市民の立場から「博物館の情報がどのような立場や価値観などから作成され発信されているものかを吟味」し、「そのあり方に応じて適切な『批判』」をし、「情報を発信」することを意味するとしている。そのための具体的手法に、NPO博物館の設立や市民による博物館評価を挙げている（金山 2003: 30-31）。

しかしながら、例えば、展示テーマへの要望アンケートを実施した際に、「意見を寄せた人たちは来館回数の多い人たちが大半であり、博物館の事業活動に関心を持っているとみられる」（金山 2003: 30）と金山自身が分析するように、構想する「博物館リテラシー」とそれを要求する対象である市民との間には距離感がある。確かに、編集された博物館の情報を批判的に吟味することは必要である。だが、そのような行為が成立するだけの状況——情報が編集されていることが表面化できる状況——が博物館にあるのかどうか、まずは問われるべきである。市民の「博物館リテラシー」の問題へと敷衍・展開するのは、本来の課題のありかをすり替えてしまうことにつながりかねない。

静岡県立美術館学芸員の村上敬は、自館の博物館評価を通じ、館の方針を決定する「経営レベルのマネジメント不在」が浮き彫りになったことを問題提起する。村上が理想とするのは、地域スポーツクラブのような組織で、それに対して、博物館において市民が経営レベルの批判や賞賛をすることは稀であるという。その上で、地域イ

ンフラとして生き残っていくために、「市民がミュージアム経営に対する知識を持ち、その健全な遂行を見守り、時に叱咤する能力」や「市民としてミュージアム経営に積極的に参画していく知性」を意味する「ミュージアム経営リテラシー」の確立を提言している。また、まずは自館と行政が評価システムを通じて「ミュージアム経営リテラシー」を高め、市民へと伝播していくことを構想している（村上 2008: 30-32）。市民にリテラシーを要求する以前に、博物館と行政関係者がリテラシーを持つべきであるという点は、前出の山西の主張とも重なる。

(3) 第3の文脈：利用支援

第3の文脈は、利用支援である（杉浦 2008）。杉浦幸子は、美術館は、利用する可能性のある全ての人が「主体的に美術館を利用し、学ぶことをサポートする役割を担って」おり、「美術館へのアクセスを提供する」活動が必要であると述べている。この活動が目指すのは、「ギャラリー・リテラシー」を身につけ、「美術館を使いこなすためのサポートをすること」であるという。そして、「ギャラリー・リテラシー」とは、『モノ』『場』『人』がさまざまな情報を発信する学びの場としての美術館を自分に合わせて活用する力、「誰でも身につけられるもので、生まれながらにして身につけているのではなく、後天的に身につけていく能力」であると解釈している（杉浦 2008: 75-76）。杉浦は学びの支援としているが、広義の利用支援という目的は、前出のスタッフが「ミュージアム・リテラシー」をアクセシビリティの問題と強く関係づけていた点とも重なる。

また、「利用支援」という表現は博物館ではほとんど用いられていないが、佐々木秀彦は、図書館での「利用教育」²⁾の実践に着目し、博物館においても同様に取り組む意味があると述べている。さらに、博物館において利用支援のためのプログラムを実施する余力の無い場合は、カルチャーセンターや大学の学芸員養成課程で行うことを想定し、提案している（佐々木 2000）。この提案と関連して、丹青研究所が平成20年に行った学芸員養成課程と資格取得者の意識調査においても、次のような意見が見られる。1つ目は、博物館の教育普及における役割で、「博物館利用者にいわゆる『博物館の使い方（ミュージアム・リテラシーなど）』をレクチャーすることも大切」という大学院生の意見（丹青研究所 2009: 150）。2つ目は、大学の一般教養科目に『博物館入門』を開講し、学生の博物館リテラシーの向上にも努めている」という大学教員による報告（同上 2009: 159）。3つ目は、「大学では、基礎教養として博物館リテラシーを中心とした科目を開講し、博物館理解者や利用法に長けた人々を増やしていく」という博物館職員による提言である（同上 2009: 168）。2つ目・3つ目の報告と提言が意味する「リテラシー」は、本章の冒頭で取り上げた佐藤学が指摘する「共通教養」としての意味合いに近い。

(4) 第4の文脈：学校教育での博物館利用

第4の文脈は、学校教育での博物館利用である（佐藤優香 2003, 2008）。佐藤優香は、「総合的な学習の時間」の導入や学習指導要領での「博物館との連携」を背景に、「学校が博物館に求めているのは、『モノや情報のデータベース』としての機能」であると指摘する。しかし、実際には博物館との関わり方、きっかけや方法を見出すことができている現状があるとする。そこで佐藤は、博物館を使いこなすための手だて——「しかけ」や「能力（リテラシー）」——が必要であると主張し、「ミュージアム・リテラシー」という表現を用いている。その意味は、「博物館を使いこなす力」、「博物館を使いこなす、展示やモノから情報を読み取る力」（同上 2003: 12-15）、「博物館をよりゆたかな学びのリソースとして活用するための能力」（同上 2008: 245）と定義している。その意味では、前述の利用支援という文脈とも近い。博物館側が主体となる「しかけ」と利用者が主体となる「リテラシー」の双方が存在することによって、博物館を使いこなす手だてが成立するという考えは、スタッフの主張とも重なる。また、佐藤は「メディアの集合体」として博物館を捉え、「ミュージアム・リテラシー」は「メディア・リテラシー」のひとつであるとしている。さらに、「リテラシーを身につけることは新しいものの見方を得ることになり、それによって世界が変わるということは、ミュージアムの場合は展示の見方が変わり、鑑賞者それぞれがその人なりの解釈を持てるということ」であるとする。佐藤は実際に、「ミュージアム・リテラシー」を育むための手がかりのひとつとして、展示が作られていく背景にある仕組みを知る（「モノが展示になるプロセスを経験する」）取り組みを行い、考察している。具体的には、博物館での「展示する／展示される／展示をみる」という3つの立場を経験できるワークショップをプログラム化し、「モノを資料化し展示するプロセスをたどることが、情報をおつかうさまざまな活動に結びついている」ことが明らかになったという。

学校教育での博物館利用を背景にはしていないが、博物館と「メディア・リテラシー」との関係について関連する議論として、村田麻里子は、「メディアとしての博物館」という観点から、次のような指摘をする。「博物館に来た人々が作品や展示をみて楽しむという行為は、作品や展示の持つ情報やメッセージを読み解いていく作業に他ならない。そして、これはまさにメディア・リテラシーを育む作業とオーバーラップしている」(水越・村田 2003: 41-52)。現在のワークショップやギャラリートーク、アウトリーチ活動について、「主に展示品について理解を深めたり、その知識を応用して作品制作を行うたぐいのもので、モノと向き合う姿勢」が見られるが、「博物館学や美術史といった枠組から出てきたものであるため」、本来活動が有する広がりを示しきれていないという。そこで、「メディアとしての博物館」という視点は、博物館にあるもののみでなく、社会全体へのリテラシーへと広げていくことで意義がさらに大きくなると提言する(同上 2003: 41)。

1-3 問題提起：「リテラシー」表現の宛先はどこにあるのか？

博物館において「リテラシー」という表現の宛先が、利用者(山西の論を除く)であることは果たして適切なのだろうか。さらに、「リテラシー」という表現を使うことに意味は見出されるのだろうか。借り物の「リテラシー」という器の中に議論を集約して、かえって問題の所在を分かりにくくさせていることはないだろうか。ここまで、主に4つの文脈からなる「リテラシー」論を見てきた。多文脈化していることは既述の通りであるが、「リテラシー」そのものの実体を捉えていくことに議論の主眼を置いていると明らかに判断できるのは、第4の文脈で挙げた「メディア・リテラシー」論からのアプローチである。それ以外は、必ずしも「リテラシー」という表現を用いて議論することの必然性があるとはいえないのではないだろうか。例えば、第2の文脈にある博物館活動への市民参加/参画を目的としたリテラシーの議論は、本来の問題は博物館側の情報公開の状態にあり、市民の「リテラシー」という表現を用いて議論すべき問題なのかどうか再考の余地がある。また、市民の立場からといっても、決してひと括りにできるとは考えにくく、情報に対する利害関係も複雑であろう。第3の文脈の利用支援という目的から生じたリテラシー論も、繰り返しになるが、元々は利用者のアクセスを支援する博物館の役割を示すための議論である。なぜ、問題の主体と表現は利用者のリテラシーへとすり替わってしまうのだろうか。

2. 意図された「リテラシー」論の課題

前章で示した博物館での多面的「リテラシー」についての所論と問題提起をふまえ、次の2点について考察を加えていく。第1は、リテラシーを定義することにどのような意味があるのか、あるいはどのような意味をもたらすのかという点について、博物館に即して問題の所在を明らかにすることである。第2は、個々の「リテラシー」論の前提にある「〇〇としての博物館」(博物館像)がリテラシーを把握することにどのような影響を与えるのか、その課題を示すことである。

2-1 リテラシーを定義すること

菊池久一は、『広辞苑』の旧版と新版での「識字」の意味の違いに着目し、リテラシーを定義するにあたって2つの立場があると指摘する。第1は、「文字の読み書き能力を獲得すること」(旧版)で、獲得する行為そのものを中心とした定義であり、動名詞的な見方である。この場合、読み書き能力の構成要素は、安定した判断基準があらかじめ決定できず、定義そのものが政治的決定の所産であると言及する。第2は、「文字の読み書きができること」(新版)で、行為の結果が重要視され、獲得対象を名詞的に捉える見方となる。こちらは、読み書き能力の構成要素は既定されており、獲得したかどうか判断基準になるという。そして、リテラシーを定義することの難しさの原因を2点挙げている。第1は、「読み書き能力」の対象が「文字」に限定されたものではなくてきていることである。そのために、対象となるのは「さまざまなものとの新たな出会いの中で獲得されていく『知識』であり」、「『知識』に何らかの付加価値ともいえる権威性が付与されるものであることから、その定義は難しくなる」という。第2は、リテラシーを獲得したかどうかの判断は社会的に権力を付与された誰かが下すことになり、定義そのものも政治的決定によるが、表面化しないことである。また、なぜリテラシーを獲得しなければならないのかという問いは、一般論の普遍的解答ができるものではなく、個人の具体的文脈において答える

る性質のものであると述べている（菊池 2004）。これと同様に、森田伸子も「リテラシーを、抽象的な情報操作能力としてだけでなく、何よりも具体的な関係を生きる人々が互いに意思を疎通しあうための具体的な力と考えるならば、リテラシーには人々が属する具体的な集団に応じた、多様な相が存在する」と指摘する（森田 2006: 143）。

しかしながら、これまで、博物館でのリテラシー研究では、定義したリテラシーの内容を問うことはあっても、定義するというこの意味については、あまり省みられずに看過されてきている。なぜならば、リテラシーが必要だと主張し、定義する主体が博物館を運営する側や研究に携わる立場にあり、自らの思惑や期待、意図が持つ権威性に無自覚になりやすいからである。それに対して、利用・活動する可能性のある立場の人たちからすれば、なぜ博物館でリテラシーが必要であるのかは理解しがたい。本稿では詳しく言及しないが、1960年代のフランスの美術館においてピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu）が行った調査結果や分析——例えば、美術館への来館者の多くが高学歴・高所得者であること——からは、来館者の能力とは生来の気質や感性ではなく、文化的な学習によって身に付いた行動を反映することが指摘されている（Bourdieu 1964=1994）³⁾。この指摘に限らず、既に博物館への敷居の高さを感じている人の立場からすれば、博物館を活用するには特別な能力や教養を身につけなければならないのかという疑問を抱くかもしれない。これでは、アクセシビリティを保障する、あるいは利用支援という文脈とは相反して、リテラシーの有無を問うことが、博物館へのアクセスの障壁となり、逆効果となりかねない。

また、博物館において議論されてきたリテラシーとは、前出の菊池が指摘する定義の2点目に挙げた、行為の結果として、利用者が「できるようになること」を前提にして意味してきたのではないだろうか。その帰結が、元々あった博物館のあり方に関する本質的な課題から、その課題を解消するための行為の結果や効果である「リテラシー」という表現とそれに関する議論へと転換されていくことにつながっていったのである。

2-2 「〇〇としての」博物館

それでは、前章で取り上げた博物館における「リテラシー」は如何なる性質を持つのであろうか。再度立ち戻って確認する。前章の1-2(1)で取り上げた山西の指摘にもあるように、博物館にはそれぞれに使命・役割がある。同時に、博物館における「リテラシー」論も、「〇〇としての」博物館というそれぞれの立場（博物館像）をおおよそ既定した上で展開されている。すなわち、リテラシーを定義したり、決定したりする側が意図した博物館像が前提とされ、それに準拠する形で内容が決まっていくのである。具体例を挙げるならば、「情報公開の場としての博物館」、「学びの場としての博物館」、「メディアとしての博物館」などである。もちろん、これらの博物館像を否定することは意味しないが、「〇〇としての博物館」は意図する側だけではなく、その意図を離れて、個人個人の利用の仕方によって当然異なってくるものである。安定した博物館像があるとは限らないことを忘れてはならない。

ところで、山内祐平は、「メディア・リテラシー」について学校を例にして、以下のように述べている。

人間がメディアを構成していくプロセスを学び、表現と意味のつながりについて深い洞察ができるようにするというメディアリテラシー本来の目的を実現すれば、その刃は教育活動そのものへの問いとして跳ね返ってくる。教師もまた、学ぶ内容を「編集」し、意図を持って学生に伝える存在であるからだ。（山内 2003: 54）

つまり、真にリテラシーを身につけるということは、「リテラシーを身につけていくプロセスもそれを要求・編集する側によって意図されているのだ」ということに気づくことができるということなのである。山内が取り上げたのは学校であるが、博物館をメディアと捉える場合でも同様の解釈は可能である。例えば、1-2(4)で取り上げた活動事例に関しても、プログラムを企画する側によって「意図されている」のであり、そのことを意識することができるのが本当にリテラシーを身につける行為なのだという複雑な構造が生じているのだ。そして、「〇〇としての博物館」像を意図するということは、意図とは異なる考えを持つ人たちが獲得したリテラシー——意図からはずれたリテラシー——を、どのようにして把握し評価していくことができるのだろうかという課題が生

じること忘れてはならない。前出の佐藤は、「どのようなコミュニケーション力が育まれたときにミュージアムリテラシーを身につけたと言えるのか、そのためのよりよいワークショップデザインとはどのような問題なのか」といった課題を挙げている（佐藤優香 2008: 254）。リテラシーを涵養するためのプログラムを行ったのであれば、その成果（リテラシーを身につけたのかどうか）を問うのは自然な流れである。しかし、その成果がプログラムを行う側の意図からはずれたものであった時、リテラシーを身につけたことにはならないのだろうか。

3. 博物館における「リテラシー」論の論点と課題の整理

本稿では、ここまで大きく2つの論点・課題があることを指摘した。1点目は、博物館におけるリテラシーの必要性は利用者を宛先とした議論のみで良いのかという点である。この点については、特に1-2の(2)、1-3、2-1で取り上げたが、「リテラシー」という表現を用いて、その内容を論じるには、決して利用者のあり方だけに課題を焦点化すべきではない。なぜならば、現状の「リテラシー」論の背景にあるのは、博物館のあり方や役割に関する問題——主に博物館のアクセシビリティの問題——であり、その問題を利用者のあり方を示す「リテラシー」という表現の中に混在させ、課題のありかをすり替えてしまうおそれがあるからである。では、なぜ本来であれば議論の対象となるべき博物館のあり方には、あまり触れられずに課題がすり替わってしまうのだろうか。その原因のひとつは2-1で述べたように、博物館での「リテラシー」の定義とは、運営する側がリテラシーの内容（構成要素）を既定——規範を設定——し、それを利用者や市民ができること（行為の結果）を意味する側面が強いからである。

2点目は、個々の「リテラシー」論が前提とする「〇〇としての博物館」像の意図からはずれたリテラシーをどのように把握していくことができるのかという点である。この点については、2-1で取り上げたリテラシーを定義することの意味合い、2-2での課題提起で触れたが、現在の博物館での主な「リテラシー」定義とは異なる立場からのアプローチが必要である。詳しくは、次章で提言していくことにする。

4. 博物館における「リテラシー」論の再構築

本章ではここまでの論点や課題に対して、博物館における「リテラシー」論の再構築の具体的内容を提示し、結論とする。

4-1 利用者だけに求める「リテラシー」論の解消

前章で述べたように、博物館における「リテラシー」論は、利用者のリテラシーのみを問うのではなく、博物館の役割とセットにして議論を進めていくべきである。利用者の「リテラシー」に課題や対象を一元化するのではなく、博物館のあり方、すなわちアクセシビリティの状態が利用者に影響を与えているという観点と共に「リテラシー」論を再構築するのである。場合によっては、「リテラシー」という表現を用いない選択肢があってもいいのではないだろうか。つまり、リテラシーの定義を再構築するか、それに代わる言葉・表現を示していくのである。前者であれば、「行為の結果」としてのリテラシーのみならず、前出の菊池が1つ目の立場に挙げた「獲得する行為そのものを中心とした定義」を含んだリテラシーを想定するのである。したがって、変化していく行為を意味するリテラシーを、個人の置かれた具体的状況に沿って理解するということになる。この場合、博物館側が意図する「〇〇としての博物館」に沿ったリテラシーを獲得できたかどうかではなく、「意図したこと」と「意図されなかったこと」との間を調停する作業が求められる。すなわち、博物館と利用者との間に生じる矛盾を含んだ関係論からリテラシーのありかを見つけていくのである。以上の作業が持つ実践的意義は、第1に、利用者のリテラシー把握のみにとどまらず、博物館にとっても自らの活動見直しにつながる点である。また、第2に、「リテラシーを育むためのプログラム」を意図的に行うだけでなく、日常の博物館利用においてリテラシーが成立する要素を見つけていくことも可能となる点である。

4-2 リテラシーの動的把握：博物館におけるリテラシーの縦糸と横糸

最後に、4-1で述べた「変化する行為を意味するリテラシー」とは具体的にどのようなものであり、把握していくことができるのか、その試案を提示する。まず、ここでのリテラシーとは、「博物館という空間において、博物館活動——例えば、展示や他者との出会い——を媒介として、物事に対する自らの見方や価値観について気づくことである。そして、新たな見方や価値観、関係性を見つけていくこと」という認識行為を意味する。より具体的に述べるならば、自らが生活世界で「知っている」「分かっている」／「分からない」と自明視してきたことや見方／考え方を、博物館においてあらためて再文脈化するという行為である。その構造は、縦糸と横糸に例えられる。縦糸とは、人がこれまで生きていく中で身につけてきた考え方・価値観・立場であり、誰にでも存在するものである。横糸とは、博物館に収蔵・展示されている資料や情報、博物館が利用者に向けて——意図的かどうかにかかわらず——働きかける活動、利用者同士が行うコミュニケーションなどである。したがって、横糸を紡ぎ出していくのを支える中心的存在は博物館である。縦糸の部分は誰にでも存在するが、普段から強く意識することはない。だが、横糸の部分と交差することによって自らの／他者の縦糸の存在に気づく。また、横糸は自らの縦糸と他者の縦糸とを繋ぐことにもなる。もちろん、繋がらずに解けたり解れたりする可能性もある。この一連の過程を追っていくことが、博物館におけるリテラシーの動的把握である。

リテラシーの動的把握とは、博物館が持つ役割や蓄積した資源が、どのように利用者に働きかけることができるのか／できないのかを含んだ、相互の関係論として「リテラシー」論を再構築することに寄与できる。つまり、従来の「リテラシー」論が抱えてきた、一方向的な役割・能力論を解消することにつながる点に意義と独自性が見出される。

【注】

- 1) 日本博物館協会が平成20年度に行った調査によると、公立博物館の所管が教育委員会である比率が減少傾向にあり、特に都道府県立館は首長部局の所管とする館の比率が増えている（参照：日本博物館協会 2009『地域と共に歩む博物館育成事業 日本の博物館総合調査研究報告書』）。
- 2) 「図書館利用法や文献探索法について指導し、利用者の図書館利用能力の育成、文献探索技法の獲得を目的に実施されるものである」とされ、「あらかじめその内容を企画、立案し、講習会やセミナーという場を設けて実施される点で能動的なサービスである」（斎藤 2007: 44）。
- 3) 博物館来館者と学歴との関係については、今日においてもブルデューによる仮説が支持されており、家庭環境と学力との相関を指摘する調査結果もある（ベネッセ教育研究開発センター・お茶の水女子大学 2009: 36, 64-69）。だが、児童を対象としたアンケートにおいては博物館に普段行くかどうかについての質問の回答結果は、学力層による大きな差は生じていない（同上 2009: 140）。

【引用・参考文献】

- ベネッセ教育研究開発センター・お茶の水女子大学 2009『教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書：お茶の水女子大学・Benesse 教育研究開発センター共同研究』ベネッセコーポレーション。
- 今井康雄 2009「言語一記号からメディアへ」田中智志・今井康雄編『キーワード現代の教育学』東京大学出版会, 3-17。
- 金山喜昭 2003「博物館と情報公開⑤『博物館リテラシー』ということ」『月刊ミュゼ』59: 30-31。
- 菊池久一 2004「リテラシー学習のポリティクス：識字習得の政治性」石黒広昭編著『社会文化的アプローチの実際：——学習活動の理解と変革のエスノグラフィー——』北大路書房, 34-52。
- 水越伸・村田麻里子 2003「博物館とメディア・リテラシー：東京都写真美術館における鑑賞をめぐる実践的研究」『東京大学社会情報研究所紀要』65: 37-67。
- 森田伸子 2006「学力論争とリテラシー——教育学的二項図式に訣別するために」『現代思想』34(5): 136-146。
- 村上 敬 2008「『ミュージアム経営リテラシー』と市民参画」『地域開発』521: 26-32
- 長崎栄三 2006「日本における科学技術リテラシーに関する研究の動向—教育分野を中心として—」『国立教育政策研究所紀要』136: 189-205。
- 小川義和 2008「科学リテラシーと科学系博物館」『科学』78(3): 343-345。
- Pierre Bourdieu et Alain Darbel avec Dominique Schnapper, L'amour de l'art: les musees d'art européens et leur public, Les

- Editions de Minuit, 1969. (=1994 山下雅之訳『美術愛好：ヨーロッパの美術館と観衆』木鐸社.)
- 斎藤泰則 2007 「図書館サービスの種類と方法」高山正也編『改訂図書館サービス論』樹村房, 25-47.
- 佐々木秀彦 2000 「『博物館の楽しみ方』講座の試み—博物館の努力と利用者の創意工夫で『博物館文化』は成熟する—」『JMMA会報』16: 9-11.
- 佐藤 学 2007 「リテラシー教育の現代的意義」日本教育方法学会編『リテラシーと授業改善：PISAを契機とした現代リテラシー教育の探究』図書文化社, 12-19.
- 佐藤優香 2003 「ミュージアム・リテラシーを育む—学校教育における新たな博物館利用をめざして—」『博物館研究』38(2): 12-15.
- 2008 「歴史系博物館における創造的な学び」日高真吾・園田直子編『博物館への挑戦 何がどこまでできたのか』美術の図書三好企画, 244-256.
- Stapp, C. 1984 “Defining Museum Literacy”, *Roundtable Reports* 9(1), 3-4. Reprinted in: Nichols, SK. 1992 ‘*Patterns in Practice: Selections from the Journal of Museum Education*’ Walnut Creek: Left Coast Press, 112-117.
- 杉浦幸子 2008 「美術館における生涯学習—ギャラリー・リテラシーを育む」神野善治監修『ミュージアムと生涯学習』武蔵野美術大学出版局, 48-80.
- 丹青研究所 2009 『平成20年度文部科学省委託事業 大学における学芸員養成課程及び資格取得者の意識調査報告書』
- 上山信一・稲葉郁子 2003 『ミュージアムが都市を再生する 経営と評価の実践』日本経済新聞社.
- 山内祐平 2003 『デジタル社会のリテラシー「学びのコミュニティ」をデザインする』岩波書店.
- 山西良平 2008 「公立博物館の在り方をめぐって」『博物館研究』43(12): 21-25.